

アンケート調査に基づく都市の河川遊歩道の役割とその望ましい姿*

Roles and preferable situation in esplanade along urban rivers based on a questionnaire*

角野昇八*¹・藤木栄治*²・内田敬*³・辻本剛三*⁴

By Shohachi KAKUNO*¹・Eiji FUJIKI*²・Takashi UCHIDA*³・Gozo TSUJIMOTO*⁴

1. はじめに

近世の江戸や大坂などの都市河川は、当時の人々の生活の中であって、洪水・下水排除や舟運などの治水・利水のための施設としてだけでなく、夕涼みや花火打ち上げなど、親しみの場としての役割も果たしていた。近代に入り、そのような親しみの場としての河川の役割は人々の心から忘れ去られつつあるが、最近再び、うるおいを与える貴重な都市空間の一部として河川空間が見直される機運にある。ただし、地域住民が河川に何を求めるようになってきているのか、あるいは河川のどの箇所を気に入り、あるいは気に入らないのか、十分に明らかにされているとはまだ言いがたい現状にある。

このような背景から著者らは、大阪のいくつかの河川周辺住民に対してアンケート調査¹⁾を行って、このアンケートの中で、ここ10年間で河川環境がよくなったと答えた回答者にその理由を尋ねたところ、城北川周辺住民は、遊歩道の整備を挙げて、それに90%近くの支持を与えた(図-1参照)。河川際の遊歩道がどのような理由で好まれたのか、あるいは遊歩道に対して何をさらに求めているのかなどを明らかにする事ができれば、今後の河川整備の方法あるいは河川整備への的確な投資を考える上で有用であろう。

そこで本年、その支持の内容の詳細を探る目的で、城北川周辺地区住民を対象として再びアンケート調査を実施した。本研究では、その調査から浮か

*キーワード：都市河川，遊歩道，アンケート調査

*^{1,3}正員，工博・博(工)，大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻(558-8585大阪市住吉区杉本3-3-138, TEL:06-6605-3078・3099, E-mail:hachi/uchida@civil.eng.osaka-cu.ac.jp)

*²学生員，大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻

*⁴正員，工博，神戸市立工業高等専門学校(神戸市西区学園東町8-3, TEL:078-795-3266, E-mail:tujimoto@kobe-kosen.ac.jp)

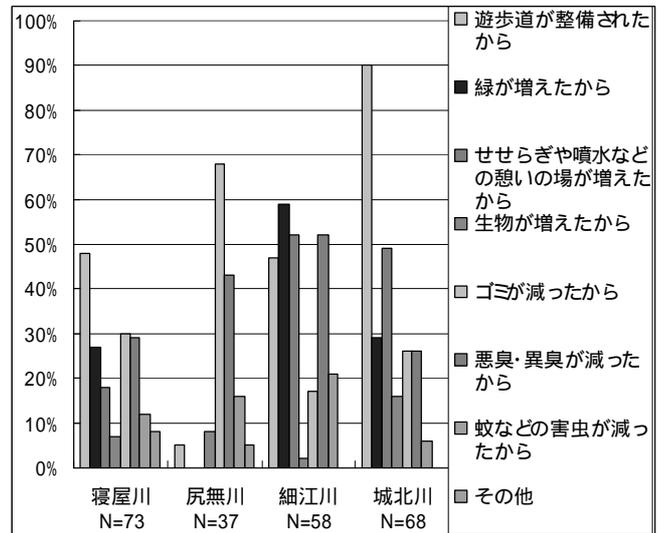


図-1 河川環境がここ10年でよくなった理由

び上がった、周辺住民が城北川およびその遊歩道に対してもイメージあるいは要望に関する結果をまとめたものである。

2. 城北川の概要

城北川は、図-2に示すように、大阪市内大川の毛馬下流で分かれて東に流れ、その後南に下って寝屋川に合流する形で市内東北部を流れる川であり、都島区、旭区、城東区内を流れる全長約5.6kmの淀川水系の1級河川である。もともと城北運河として昭和15年12月に開削され、臨海部を除けば大阪で最後に開削された運河となった。その後、高度経済成長とともに汚濁が進んだため、大阪市は昭和40年に浄化対策事業を起こし、その際に遊歩道も同時に整備された。昭和60年には1級河川となり、翌年からは城北川改修事業が始まった。平成2年には城東区部分は完成し、現在は残りの旭区、都島区で工事が行われている。また、昭和62年に「ふるさとの川モデル河川」に指定されて整備されている。写真-1は城東区内の城北川を望む典型的景観を表

している。



図 - 2 城北川的位置
(MapFun.comの地図に加筆)



写真 - 1 城北川の典型的景観

3. 調査方法と集計

今回、アンケートを行うにあたり、その質問内容の設定や項目の整理のために、実際に遊歩道を利用している人々を対象にして、城東区で予めヒアリング調査を3回に分けて行った。ヒアリングでは、遊歩道中での好ましく思う場所や事物あるいはその逆、また遊歩道利用の理由、川に対して感じることなどを聞いた。その上で、ヒアリング調査の結果から出てきた好ましいもの、好ましくないものの具体的な事物や気持ちに基づいてアンケートの質問項目を作成して、城北川周辺に住んでいる住民にアンケ

ート調査を行った。アンケートでは、利用者の属性、利用理由、利用にあたり好ましいもの好ましくないもの、川に対するイメージや遊歩道利用での要望などを聞いた。選択式の設問では複数回答で順位付けをしてもらっている。アンケートは、城東区を南北に流れる区間の両岸を対象地域として、2003年1月12,13日にポスティングによる各戸配布を行い、回収は郵送回収とした。1戸当たり4通のアンケート用紙を入れている。また配布エリアは、南北は董橋から南董橋までの約500m、東西は川の両岸に約500mずつに住んでいる計1775戸に配布した。表-1はアンケートの配布数並びに回収率を示す。

表 - 1 アンケートの配布数と回収率

	世帯数	部数
配布数	1775	7100
回収数	350	648
回収率	19.7%	9.1%

4. 調査結果

アンケート回答者の属性は、女性が若干多く(56%)、年齢は20代から60代迄ほぼ様な分布を示した。また、その地への居住年数としては21年以上が36%で最も多く、以下、11~20年(23%)、6~10年(19%)、1~5年(15%)と続く。自宅から城北川までの距離は徒歩5分以内が約85%で最も多かった。

(1) 城北川に対する評価

まず、「川の存在を意識するか?」と設問し、周辺の人々の心の中の城北川の存在を問うてみた。その結果、実に94%もの人々が「する」と回答していて、人々の心の中の城北川の存在が大きいことがうかがえる。ただし、これにはアンケートへの回答者はそもそも川に関心がある人からの回答が多い可能性があることにも留意する必要がある。

図-3は、「川の存在を意識する」と回答した回答者に対して城北川のイメージの良否を尋ねた結果である。38%が「良い」と答え、「普通」の32%と合わせると70%もの人々が「普通」以上のイメージを持っていることがわかる。なお、図中のnは

回答者総数であり、以下同じである。また図 - 4 は、図 - 3 の回答者の全員に城北川のどこがいいのかを尋ねた回答を利用頻度別に示した。利用頻度が高ければ水の自然や鳥、気持ち、空間などがほぼ等しく挙げられているのに対して、利用頻度が低い人は水の自然を多く挙げていて、より強く水を意識していることがうかがえる。いずれにしても、自然の少ない都市にあって都市河川は自然とそれによる心の安らぎを与える貴重な空間であることが示されているといえる。なお、イメージの悪いものとしては、容易に予想されるように、ゴミ、水質、臭いなどが挙げられていた。

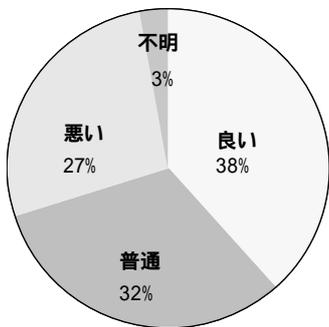


図 - 3 城北川に関するイメージ (n=522)

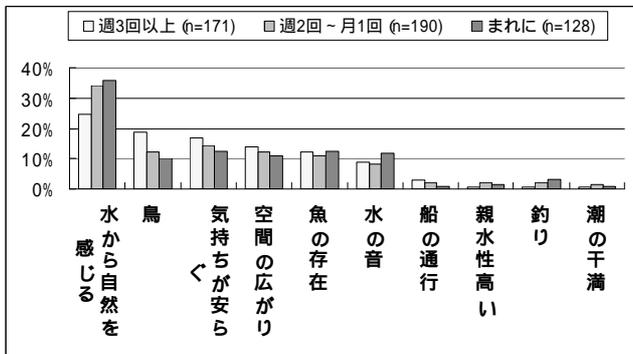


図 - 4 城北川のイメージとして良いところ (n=489)

(2) 遊歩道の認知度と利用目的

川に次いで遊歩道の認知度を調べたところ、97%の人が知っていた。また、遊歩道の利用に当たって川があった方がよいかどうか尋ねたのに対して、84%もの人々が「はい」と回答し、「川のそばの遊歩道」が人々に好まれていることが明らかになった。また遊歩道の利用目的を択一式で尋ねたところ、散歩、買物が両者とも 35%程度で最も多かつ

た。遊歩道が身近な散歩場所として親しまれていることがわかる。また買物の利用者が多いのは、女性の回答者が若干多かったことのほか、遊歩道を通路として利用している人も多い事を示している。

(3) 遊歩道利用に当り好ましいもの

図 - 5 は、遊歩道を利用する際の好ましいものとして挙げられた項目(複数回答)を利用頻度別に示したものである。図 - 4 の場合とは異なり、利用頻度に関係なく、静けさ、木々、川の順に多く、人々は川を背景とした都心の静寂さと木々の緑を遊歩道に求めていることがうかがわれる。これらの次に多い「桜」、「地面の舗装」は、住民の要望に行政が応えて実現したものである。

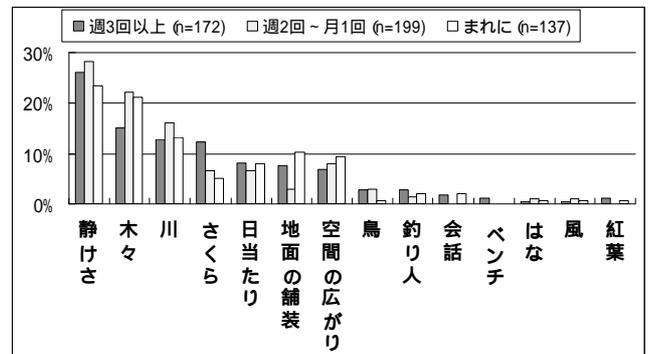


図 - 5 遊歩道を利用して好ましいもの (n=508)

(4) 城北川遊歩道に望むもの

図 - 6 は、城北川の遊歩道に対する要望に関するフリーな記述の中からさまざまな名詞の出現頻度を表したものである。「犬」が飛びぬけて多いが、それと「ゴミ」あるいは「糞」「マナー」などをあわせて考えると、諸施設が必ずしも十分に整備されていないこの遊歩道であっても、ベンチ、トイレなどの施設整備よりも、利用者相互の利用マナーの向上とそれに伴う快適な環境をまず何よりも望んでいることがわかる。

(5) 自由連想した川の遊歩道に望むもの

図 - 7 は、頭の中に自由に連想してもらった川の遊歩道に関するフリーな記述の中からの同様の整理結果である。図 - 6 の場合とは大きく異なり、誰もが連想するように、きれいな水が流れていて、花、

緑にあふれ、また夜は蛍が飛び交い、ベンチなども整備された、そのような川の遊歩道を望んでいる、あるいは理想の姿として描いていることがわかる。

ところでアメリカの心理学者のマズロー（1908-1970）は、人間の5段階欲求説を唱え、ヒトの欲求

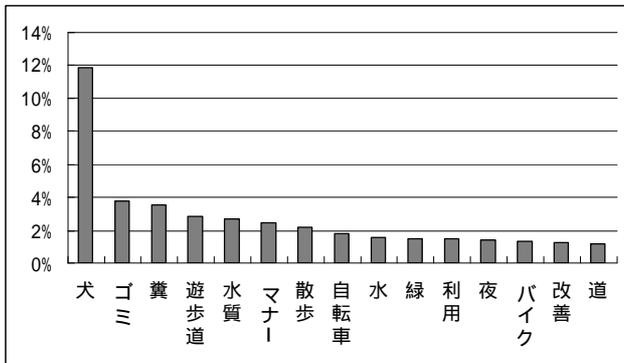


図 - 6 城北川遊歩道をよくするために望むこと
（自由記述文から単語数のカウント）

は食欲・性欲・睡眠などの 生理的欲求および危険や脅威に対する 安全の欲求など原始的あるいは低次元の欲求が満足されれば、順次、グループ内の一員であることの 所属と愛の欲求、自己信頼・他者からの承認などを求める 承認の欲求、あるいは自己発現・実現などを求める 自己実現の欲求の高次元のものに移っていくとしている。図 - 6および図 - 7から示唆されることは、川あるいは社会基盤施設一般に対しても人々は段階的欲求を持つ傾向にありそうであることである。河川整備を例にとれば、生理的欲求は川に流れがあることであり、安全の欲求は当然ながら治水の欲求であろう。そして、これらに利水の欲求を加えたものは低次元の欲求といえよう。さらにこれらの上に水質・ゴミ・マナーの欲求、環境的整備、文化的施設整備の欲求があると考えれば、その段階的欲求に沿った整備でないもの、たとえばゴミの問題があつて低次元の要望が満たされていないのに、そこへの歴史標識板などの文化的施設の設置をいくら計画しても人々からには受け入れられないことが予想される。このことはすでに大阪市内の複数の河川を対象とした調査結果の

一部（図-1）からも示唆されている。図-1に示されるように、ここ10年で河川環境がよくなった理由として、特に尻無川ではゴミと悪臭の減少を挙げた回答が他の項目よりも多い。このことと先の考察を合わせて考えるとき、このような河川周辺での噴水や歴史標識板などの環境・文化施設整備は、この段階以降になされるべきであることが結論づけられよう。

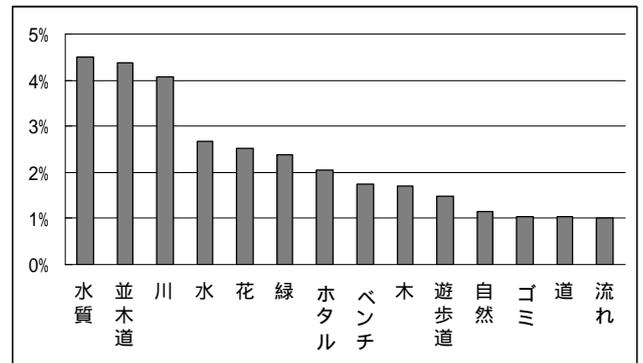


図 - 7 川のある遊歩道に望むもの
（自由記述文から単語数のカウント）

5. おわりに

「ヒトの心」の観点からの河川整備の重要性が徐々に認識されだしてきているようである。ただし、その観点からの問題点の指摘はできても、その詳細な分析や具体的実現方策についてはまったく明らかになっていない。今後は人文学的視点からの研究も融合させた詳細な分析と、そこから帰結される望ましい具体的方策について明らかにしていく必要がある。本研究は、土木学会関西支部調査研究委員会活動および大阪市立大学プロジェクト研究の一環として行われた。ここに記して謝意を表す。

参考文献

- 1) 角野・大谷：「大阪の諸河川に対する周辺住民の意識に関する一調査」第3回河道の水理と河川環境に関するシンポ論文集，187-194，1997。
- 2) A.H.マズロー（小口忠彦訳）：「人間性の心理学」産能大学出版部，506p.，1987。